句集

水脈

福田清人

健二

田清人

句集　水脈

昭和五十九年十月二十日　印刷
昭和五十九年十月二十五日　発行　〔非売本〕

著者　福田清人

発行所　東京都杉並区成田西二ノ六ノ一五
麥笛書屋

印刷所　東京都中央区入船一ノ五ノ一一
弘報印刷株式会社

限定三百五十部

句集

水脈

福田清人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

自序……5
春を待つ……7
旅寝の日……27
独り酒……51
拾遺……69
俳句とのゆかり……75
略歴……82

自序

ちょうど十年前の昭和四十九年は、私の古稀の年に当った。その記念に『麦笛』と題した小さな句集を編み、親しい人々に贈った。

それ等は戦後の鬱を散ずるため、大森や中央線沿線に住む文学仲間が時々集っての句会での句や、旅した折の即興を書きとめた句など拾ったもので、二三九句と、それに青郊連句会の歌仙三巻も併せ載せた。

『麦笛』と題したのは、少年の日、長崎の岬の道を歩きつつ吹きならした、幼い麦笛の音の如きものとの意味である。巻頭の句、

麦笛や少年の夢定まらず

それから六年目、昭和五十五年には喜寿の年を迎えた。古稀以後の消息代りにと、折々の句を集めてみたが、僅か百句ほどしかなか

った。それで、『麦笛』に落した三十余句を添え、幼少時のことを書いた随筆を加えて『坂鳥』と題した。

坂鳥とは「渡り鳥の朝ねぐらを出でて山を越えて飛び行くをいう」と歳時記にある。

遠き巣へ坂鳥一羽の思ひかな

喜寿を越えて、いつまで、坂鳥の如くありうるかの思いもしないではないが、その句集の題とした。

それから四年目、昭和五十九年早くも傘寿の年を迎えることとなった。

そうした年の節目として、昭和五十五年以後の句を集めて『水脈』と題した。この三、四年、同郷の知人を中心に月に一回小さな無月会と名づけた句座を持ったが、昨秋、体調をそこない以来私は休んでいる。この巻には、その折の句が多い。また、最後に、それ以前の旅の句がみつかったので収めた。合せて一八三句である。

傘寿の年記念にと編んだが日頃お世話になっている方々に贈る。

春を待つ

老妻と旅の企て春を待つ

幻や春待ちて北満旅せし日

残雪に吸ひこめられし物の影

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

大空を拭ひ武蔵野雪残る

境界の争ひ解けて野焼かな

杉林野焼をしかと受け止めぬ

氷る田に石投げ競ひし通学路

濠凍り投石載せてたそがれぬ

城濠も凍りて町は暮れにけり

煉瓦路に夜店並びし日の銀座

朝市の波止場通りに夜店の灯

朝市の客にまた会ふ夜店かな

息災と代筆をする遍路宿

夜半目覚め遍路を想ふ年となり

海平ら月夜真珠の大村湾

湾霞み真珠筏は揺れてゐる

月城址からめ手細きいろは段

大村城址四十七の石段あり、いろは段と呼びぬ

七島は霞みて伊豆の海静か

女学院夕べの聖歌藤の花

植木市鉢に溢れし藤の花

潮騒や岬民宿春眠る

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com